

日本プロレタリア文学集・4



日本プロレタリア文学集・4

初期プロレタリア文学集 4

日本プロレタリア文学集・4

初期プロレタリア文学集 四

定価 二六〇〇円

一九八五年八月二十五日 初版

発行者 松 宮 龍 起

発行所 株式会社 新日本出版社

〒151 東京都渋谷区本町一の八の七
電話 (〇三) 三三〇一七一一
振替 東京 三一三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

日本プロレタリア文学集・4

初期プロレタリア文学集

(四)

目次

新井紀一

競点射撃……………九

坑夫の夢……………一七

怒れる高村軍曹……………二五

煽動……………三六

燃ゆる反抗……………四三

雨の八号室……………五三

闘争……………一五九

内藤辰雄

立ちん坊の死……………二〇一

馬を洗う 二二四

閉ざされた窓 二二〇

人夫市場 二四一

吉田 金重

人殺し 二五五

雨を衝いて 二六〇

洋刀の響 二七九

敗残者の群 二八四

盲狂人の死 三〇七

鉄の呻き 三三二

加藤 由蔵

職工思想調査書 三四五

狩勝国境 三五三

銀貨……………三〇

丹 潔

玩具の閃き……………二七

諸根正一

坑夫の死……………三五

中村星湖

馬鹿野郎！……………六一

水守 亀之助

万 歳……………六九

長谷川如是閑

象やの糸さん……………四一

片岡 厚

移住者……………四七

解説……………祖父江昭二…四三

発表年月日と掲載文献……………奥一

新井紀一

競点射撃

を見ると、彼はすっかり虫の居所を悪くして無暗に部下に当り散らした。そういう時には、いつも午前九時に演習に引つ張り出す処を八時頃から始めたり、又午後四時演習を終う処を五時過ぎまでも引っぱり廻した。其の上最も猛烈な演習をやらんでやらせた。

其の日は連隊の競点射撃の行われる日であつた。S大尉は今度も自分の中隊に賞状と、優勝旗を取りたいと思つて、夜となく昼となく心配していた。併し如何に自分一人やきもきしても、又熱心になつても、部下が熱心になつて呉れなければなんにもならなかつた。其の爲めにS大尉は自分が宿直で隊に残つてゐる時は自分で、又自分が居ない時は部下の將校、下士に監督をさせて朝は起床喇叭が鳴ると直ぐから夜は日夕点呼まで、間がな隙がな射撃予行演習を督励した。

彼が毎朝、自宅から中隊に通勤するのに若し、營門をくぐつて自分の中隊に入るまでに一人でも、部下が熱心になつて射撃予行演習をしてゐるのを見ると、非常に気嫌が好かつた。が、これに反して若し誰れ一人其れをやつてないの

彼は物事が凡て自分の意の如くならないでむしゃくしゃする時は、いつでも部下の兵隊に嚴重な軍装を施さして早駆競争をやらせるのであつた。背囊の周りに毛布やら外套、工作器具、飯盒、靴——と云つたような一切の陣営具を取り付けたのを背負わして銃を持たせ、早駆競争をさせるのを見てゐると彼の怛々とした胸の中は、春の風に逢つて解ける氷のようにいつともなく寛いでゆくのであつた。其の早駆競争の時の目標になるのはいつでも、營庭の西南の隅にある「お手植の松」であつた。「お手植の松」はカイゼルが未だ皇太子だつた頃此の連隊に行幸された紀念に植えられたもので今では可なり大きな松になつてゐた。

S大尉は××戦争の時には少尉で出征し、鉄十字勲章まで持つてゐる名譽ある士官であつた。其の胸の中はいつも砲煙彈裡に馳突して敵壘を乗り取ろうとする利那の、自分の勇姿を描いて独り胸をときめかせてゐるのであつた。そして昔の騎士が持つたであらう功名心に驅られて口癖のよう

に「軍人は戦争がなくちゃ駄目だ」と云っていた。實際彼が戦争に行った時には、文字通りの弾雨の中を馳突したのであった。が、運が好いと云うのであろう。身には微傷だも負わないのであった。

彼は其の時を追想する毎にいつも（人間は死ぬ時が来なければ決して死ぬもんじゃアない）と思った。そして若し其の時死ぬ者があれば、其の者は此の戦争に来ないでも必ず他の場処で同時に、何か他の原因で死ぬに違いないと思つた。彼がこうした信念を得るに至つたのは如何にも皮肉な爆弾の悪戯（彼は悪戯と思つた）を見てからであつた。

其れは××戦争も終末に近づいて、×原に長期の対陣をしてる時であつた。両軍共に塹壕の中に潜んで華々しい戦闘もなく、可なり倦怠を催してる時であつた。と、云つて一日として壕から壕に向つて行われる擲弾の応酬、銃弾の交換の止んだ時とてないが、敵前に全身を曝露するような事のないため、自然誰れの心にも白兵戦の時のような緊張は見られなかった。何れも其の心に或る余有が出来て来た。従つて自己の生命を愛む情は猛然と、今までに見られない程の熱度を以つて蘇つて来た。自己を愛む情は臆て敵を愛む心にまで拵げられて行つた。彼等は互に殺し合う事に對して「何の爲めに？」と云う疑惑をすら抱くようになって

来た。

そうした陣中の塹壕に於て彼が展望鏡に對つてゐる時であつた。ヒューッと云う唸りと共に飛んで来た銃弾は見事に彼の覗いていた展望鏡の反射鏡を打ち抜いてめっちゃめっちゃに壊して了つたのであつた。塹壕の中にある身方に取つては、それはまるで眼玉を抜き取られたようなものであつた。其れを早速修理しない限り敵の情勢はまるで知る事は出来なかつた。其の結果は何時敵が襲撃して来るか解らないと云う不安を生んで、此の一隊をまるで闇黒の雰囲気で覆うて了つた。

彼は其の展望鏡を修理する間、自分の展望当直と云う責任上壕壁の上に頭部を曝露して、肉眼で以つて直接に敵情を監視しなければならなかつた。時々沈滞を破るようにお役目的に響いていた銃弾や擲弾の爆音は此の時俄然として眠りから覚めたように活潑となつて来た。生命を、生命をと覗つて飛んで来る魔の黒手は彼の頭部を、又頬を幾度其の冷やかな手で撫でて通つたか知れなかつた。最初は力を罩めてふんばつていた彼も、其の度びにハッハッと畏怖して首を縮めるので、初めは全身に漲つてると思つてた生命が、だんだん萎縮して何処からか姿を変えて抜けてくように思つた。

「S少尉殿！ 展望鏡の修理が出来ました」と、下士から注意を受けてやっと壕壁から首を引つ込めた時の彼は、まるで喪心した人のように腑抜けてぼんやりしていた。

又、それから間もなくであった。矢張り彼が展望鏡当直として其処に立つてゐる時、後方の司令部から滅多に第一線に来る事のない参謀官が視察に来た。参謀官が彼と並んで敵状について彼の説明を聞いてゐる時であった。例の展望鏡目がけて投げられたらしい敵の擲弾が直ぐ参謀官の足許に落ちて来た。そして当に爆弾の内部に燃え入ろうとする口火から気味の悪い黒煙をぶすぶす吐いた。其の附近にいた兵達ちは突壁の間にパツと身を転ばして横櫓に隠れた。と、其の刹那、擲弾は轟然として爆発した。横櫓から出て来た彼は其処に逃げおくれた参謀が四肢を異にして斃れてゐるのを発見した。

（運が悪いのだ）と、其の時彼は思った。が、彼はふと此の参謀は今日此処へ来て死なないまでも屹度、他の処で何かの爲めに死にはしなかつたらうか、と云う事を漠然と思つた。どうも死の命数が来たのだと思われなかつた。

其の時から彼は自分の身には神の加護が——云い換えれば死の命数が未だ来ないのだと云う事を一方では迷蒙として笑い排け乍ら又他の一方ではどうしても、其れは真実であ

ると信じていた自分を発見した。

（俺は神の定めた死の時が来るまでは、如何なる弾丸裡に入つても決して死なない）と云う事を信ずる力は（軍人は戦争がなくちゃ駄目だ）ということを、敢て衝氣ばかりでなく本心で彼に云わしめた。

然し彼の欲する戦争は其の後容易にやつて来なかつた。彼の欲求して止まない功名心は驕て、軍隊の年中行事なる競点射撃に向つて行つた。そして連隊長、師団長からの賞状や名誉旗に向つて憧憬れしめた。

彼は平常の修練を積んだ自分の中隊が必ず今日の競点射撃に於ても、連隊随一の名誉中隊となる事を信じて疑わなかつた。彼は毎もよりぐつと早目に家を出た。其の途上に於ても彼の胸は連隊長からお賞めの言葉を頂き、名誉旗を授かり、其の結果は驕て古参者を出し抜いて自分の特別の拔擢を見るであらう、いろいろの空想を描いていたのであつた。

彼は衛兵達の敬礼に対して、得意の微笑を嚴肅と云う型に入れて少し許り投げ与え、肩を聳やかして営門をくぐつた。彼の眼は本能的に自分の中隊に向けられた。それから

くるり一廻転して各中隊を順次見廻した彼の顔は見る見る曇つて来た。

（どうも怪しからん、週番は何をしているのだ！）彼はこう思い乍ら再びその眼を自分の中隊の方にやったが、他の中隊が全部、今にも射場に向つて出発しようとし、中には既に出発しつつあるのさえあるに、彼の中隊からはぼつりぼつりと二人三人位ずつ呑気そうに出て来る処だった。

彼はもう嚇ッとなつて了った。（こんな不熱心な事でどうして今日の射撃に優勝旗が取れるもんか。それに少尉も少尉だ、昨日帰る時にあれ程他中隊におくれないようにと命令して置いたのに此の態はなんだ！）

彼は広い營庭をまるで飛ぶように突つ切つて自分の中隊に駆け込んだ。そして実戦の間で鍛え上げたと言頃自負してる其の声を張り上げて「整列！」と叫んだ。

週番肩章を肩から吊つたT少尉は明らかに狼狽の色を現わし乍ら、あたふた士官室から出て来た。そして彼の前にピタリ立ち留つて敬礼した。が、彼は鋭い目礼を返した許りで手を挙げようとしなかった。

S大尉の号令を聞くと各班からは一斉にどかどか出て来た。彼は其等を尻目にかけて乍らポケットから時計を出して見た。未だ六時に十分前であつた。彼は時計を見ると、自

分の怒りが余り由縁のない軽忽過ぎたように思われて来た。何故なら彼は昨日帰る時に（六時までには舍前に整列させて置くように……）とT少尉に云い残して置いたのだから。

併し一旦嚇ッとした彼の胸は容易におさまらなかつた。

それはT少尉に対する怒りは解けても、他の中隊に先を越されたと言ふ事の一点に自分の怒りの対象を集めてのそれであつた。彼は部下中隊のきちんと整列した隊形を見ると、本能的に其れに早駆けがさして見たくなつた。

（今此のまま射場に向つて出発すれば未だ一時間あるのだから充分間に合う。けれど早駆けなどさしては屹度遅れて了うに違いない）彼はこの場合にもこうした冷やかな理性を有ち乍ら、其の本能的に募つて来る狂暴性をどうする事も出来なかつた。

「目標——ッ、お手植の松！ 往復三回——早駆け用意——ッ」

と、号令をかけた彼の声には、それでも或る落ち付きと莊重さがあつた。一隊百二十名許りの兵達は一列に並んで上体を前屈みにし、左足をふんばつて眼のようにし「それッ」と云う動令の下るのを待った。（S大尉の悪い癖が出たな！）という色を顔に現わし乍らも、部下の兵達の眼には必死の覚悟——競争心が潜んでいた。いつもの彼の癖を

呑み込んでる部下達は（左翼十番以下は早駆け元いッ）と云う命令を恐れて一番にならないまでも切めてびりから十名の内には入りたくないと言ふ小腹があった。

「それ——ッ」と云う号令と共に、S大尉は高く指し上げてた指揮刀を颯々と下におろした。

亀の子の甲羅のような格恰に背負った部下の姿が、だんだんお手植の松の方へ小さくなってゆくのを、彼の内には、彼の故のない怒りは霧のように何時ともなく消えていった。一旦遠ざかった靴の音が又びんびん近くなって目標を一廻りして来た時の彼等の顔には流石に疲労の色が浮んでいた。併し彼等は再び亀の子のような格恰をしてだんだん小さくなっていった。愈々最後の三四回目を廻って来た時には、先頭とびりの者とは二百米突からの差が出来ていた。そして其の何れもが苦しげな息を急速に呼吸し乍ら、バツバツと氣重い靴の音をさせて出立点に戻って来るのであった。

其等をじつと見ていたS大尉は、彼等の苦痛を訴える顔と呼吸とから云うに云われない苦痛圧迫を自分の胸に感じて来た。彼は最初の位置から少しも動かないに拘らず、まるで皆と一緒に早駆けしような苦しさを胸に受けたのであった。彼はもう毎ものようにびりになった十名に向つて

もう一遍早駆けのやり直しを命ずる元気がなかった。彼は成るべく部下の顔を見ないようにして、時計を出して見た。時計は六時二十分を示していた。

彼は今更のように（おやッ）と思った。そして慌てて他の中隊を見廻した。が、其処らにはもう先刻まで大勢並んでた兵隊の影は少しも見当らなかつた。其の瞬間、彼の頭には午前七時までに射場に到着するよう昨日連隊長から命じられてあつた事を思い出した。（これはしまった!）と思うと、彼の額は再び嚇つとなつて了つた。同時に、泣きたいような後悔と自責の念が交々彼の重苦しい圧迫を受けた胸を怯やかした。けれど、三十分足らずの間に一里余りあるNの射場まで行かなければならない、と思う心は、幾分平静に復した彼の心を再び狂暴にまで引き戻して行つた。彼は散々の早駆けでぐたぐたに疲れてる部下に向つて、一分間の休憩を与うる暇もなく、悲痛な声を絞つて「駆け足——ッ」と云う号令をかけた。

S大尉ははつと息を吐いて時計を見た。七時三分前であつた。僅か一里位の行程ではあつたが、無鉄砲な駆け足をしたので彼はもう眼が眩りそうであつた。彼は額に真黒な汗を滲ましたまま、直ぐ其の足で連隊長の許に走って行つ

た。そして（第××中隊只今到着しました！）と報告をした。他の中隊の者は一斉に、此の時間一杯にあたふた駆けつけて来た彼の中隊に好奇の眼を向けていた。

報告から帰って来た彼が、自分の中隊の処まで来た時其処には最初營門を出る時の三分の二位の人員しかいなかった。眼を遙かの彼方にやると、まるで運送車が揺りこぼした米粒のような落伍者が、二人三人と固まり乍ら桑畑の葉越しにのそりのそりと歩いてた。又自分の後ろについて来て其処に並んでる三分の二の兵を見渡すと、どれもこれもが皆血の気の失せた土色をして呻いでいた。

（意気地なし共が！）彼はこう呟き乍らむしゃくしゃする胸をじつと押えつけた。そして逐次に到着する落伍者を忌避しげに睨みつけた。

（無理と云やア無理とも云えよう、だが此の位の事で兵古垂れるようです。脆坐共が！）

彼はこうしてむしゃくしゃする胸を抱え乍ら元氣のない部下を眺めてる内に、何となく優勝旗なぞ兎でも取れそうもない氣がして来た。彼はぼつりぼつりと後から来る落伍者が全部到着するのを待つて、十分間の休憩を与える事にした。そして切めて其の間に元氣を回復さして、好成績を獲得するようにしようと思った。部下の兵達は三々伍々固

つて煙草に火をつけ、口を尖らかし乍ら何かひそひそと話し合っていた。

（奴ら俺の悪口でも云ってるんだろう）と思い乍ら、彼は一人其処から離れて三百米突の射朶に並んでる標的に見入った。（あの真ん中を撃ち抜けば好いのだが）と念じるように見入ってる内に、そんな事は到底望めないと云う氣が再び絶望的に彼の頭を襲って来た。彼は頭にたかった毛虫をでも振り捨てるように烈しく頭を左右に振って、此の考えを払い捨てようとした。そういう処へ連隊長の方から射撃開始の命令が下った。

彼は哀願するような又励ますような色を眼の内に漲らし乍ら、射撃する部下の傍に立っていた。そして其の発射する動作と、遙か前方の標的とを交互に見守った。一から十二までの中隊号を表した記号板を立てた射場からは、間断なしに銃声が上がった。彼はその度びに標的の方に現われる点数を示す旗に鋭い視線を投げた。

「やッ、八点が出た！ やア、五点——うむ今度は六点！」——と彼は他の中隊の成績をはらはらし乍ら算量していた。

彼はもう氣が氣ではなかった。何故なら自分の中隊では